

## 第一の手記

恥じだらけン生涯バ送って来やした。

自分にゃ、人間の生活ちゅうもんが、見当ン付かんとですもん。自分な東北の田舎に生れましたけん、汽車をはじめて見たとは、だいぶん大うなってからでした。自分は駐車場のブリッジを、上って降りて、そうしてそれが線路をまたぎ越えるために造られたものだという事には全然気づかんで、ただそれは駐車場の構内を外国の遊戯場のごて、複雑に楽しく、ハイカラにするためにだけ設備してあるもんだとばかり思うとった。ばって、かなり永い間そがん思うとった。ブリッジの上ったり降りたりは、自分にゃむしろ、垢<sup>あかぬ</sup>抜きのした遊戯で、それは鉄道のサーヴィスの中でも、最も気のきいたサーヴィスの一つだと思つたが、のちにそれはただ旅客が線路をまたぎ越えるための<sup>すこぶ</sup>頗る実利的な階段に過ぎんのを発見して、にわか<sup>にわか</sup>に興が覚めた。

また、自分は子供の頃、絵本で地下鉄道ちゅうのを見て、こりもやはり、実利的な必要から案出せられたもんじゃなく、地上の車に乗るよりは、地下の車に乗ったほうが風がわりで面白か遊びだけんとばかり思うとった。

自分な子供の頃から病弱で、よく寝込うだが、寝ながら、敷布、枕のカヴァ、掛蒲団のカヴァを、つくづく、つまらない装飾だと思ひ、それが案外に実用品だった事を、二十歳ちかくになってわかって、人間のつましさに暗然とし、悲しか思いばした。

また、自分は、空腹という事を知らん。いや、それは、自分が衣食住に困らない家に育つたという意味じゃなく、そがん馬鹿な意味じゃなく、自分には「空腹」という感覚はどがんものだか、さっぱりわからんじゃた。へんな言いかたばって、おなかが空いとつても、自分でそれに気がつかん。小学校、中学校、自分が学校から帰って来ると、周囲の人たちが、それ、おなかが空いたつど、自分たちにも覚えがある、学校から帰って来た時の空腹は全くひどかもんな、甘納豆はどがん？ カステラも、パンもあるばい、などと言って騒ぎますけん、自分は持ち前のおべっか精神を發揮して、おなかが空つた、と呟いて、甘納豆を十粒ばかり口にほうり込むばって、空腹感とは、どんなものだか、ちっともわからんじゃた。

自分じゃたつちや、そりゃ<sup>もちろん</sup>勿論、どがしこでんものを食べるばって、空腹感から、ものを食べた記憶は、ほとんどなか。めずらしかと思つたものを食べる。豪華と思われたものを食べる。また、よそへ行って出されたものも、無理をしてでん、たいてい食べる。そうして、子供の頃の自分にとって、最も苦痛な時刻は、実に、自分の家の食事の時間じゃた。

自分の田舎の家では、十人くらいの家族全部、めいめいの<sup>ぜん</sup>膳を二列に向い合せに並べて、

末っ子の自分は、もちろん一ばん下の座じゃったばって、その食事の部屋は薄暗く、昼ごはんの時など、十幾人の家族が、ただ黙々としてめしを食っている有様には、自分はいつも肌寒い思いをした。それに田舎の昔気質の家だったけん、おかずも、たいてい決まっていて、めずらしかも、豪華なもの、そんなものは望むべくもなかったけん、いよいよ自分は食事の時刻が恐怖じゃった。自分はその薄暗い部屋の末席に、寒さがたがた震える思いで口にごはんを少量ずつ運び、押し込み、人間は、どうして一日に三度々ごはんを食ぶっとじゃろう、実にみな厳粛な顔をして食べよる、これも一種の儀式のようなもので、家族が日に三度々、時刻をきめて薄暗い一部屋に集り、お膳を順序正しく並べ、食べたくなくても無言でごはんを噛みながら、うつむき、家中にうごめいている霊たちに祈るためのものかも知れん、とさえ考えた事があるくらいだった。

めしを食べなければ死ぬ、という言葉は、自分の耳には、ただイヤなおどかしとしか聞えなかった。その迷信は、(いまでも自分には、何だか迷信のように思われてならんが)しかし、いつも自分に不安と恐怖を与えた。人間は、めしを食べなければ死ぬから、そのために働いて、めしを食べなければならん、という言葉ほど自分にとって難解で晦渋で、そうして脅迫めいた響きを感じさせる言葉はなかった。

つまり自分には、人間の営みというものが未だに何もわかっとらん、という事になりそう。自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食いちごうとるごたる不安、自分はその不安のために夜々、転転し、呻吟し、発狂しかけた事さえある。自分は、いったい幸福じゃろうか。自分は小さい時から、実にしばしば、仕合せ者だと人に言われて来たが、自分ではいつも地獄の思いで、かえって、自分を仕合せ者だと言うたひとたちのほうが、比較にも何もならんくらいずっとずっと安楽なように自分には見える。

自分には、禍いのかたまりが十個あって、その中の一個でも、隣人が背負ったら、その一個だけでも十分に隣人の生命取りになるのではあるまいかと、思った事さえあった。

つまり、わからんと。隣人の苦しみの性質、程度が、まるで見当つかん。プラクテカルな痛み、ただ、めしを食えたらそれで解決できる痛み、しかし、それこそ最も強い痛苦で、自分の例の十個の禍いなど、吹っ飛んでしまう程の、凄惨な阿鼻地獄なのかも知れん、それは、わからん、ばって、それにしては、よく自殺もせず、発狂もせず、政党を論じ、絶望せず、屈せず生活のたたかいを続けて行ける、苦しくなかとじゃなかつか？ エゴイストになりきって、しかもそれを当然の事と確信し、いちども自分を疑った事が無かつか？ じゃなかつか？ それなら、楽だ、しかし、人間というものは、皆そがんもので、またそれで満点なのではなかつか知らん、わからん、……夜はぐっすり眠り、朝は爽快じゃろかい、

どがん夢を見とっとじゃろう、道を歩きながら何を考えとっとじゃろう、金？ まさか、それだけでも無かろう、人間は、めしを食うために生きてとる、という説は聞いた事があるような気がするばって、金のために生きている、という言葉は、耳にした事が無か、いや、ばって、ことに依ると、……いや、それもわからん、……考えれば考えるほど、自分には、わからんごてなり、自分ひとり全く変ってとるごたる、不安と恐怖に襲われるばかり。自分は隣人と、ほとんど会話が出来ん。何を、どういったらいいのか、わからん。そこで考え出したのは、道化じゃった。

それは、自分の、人間に対する最後の求愛じゃった。自分は、人間を極度に恐れていながら、それでいて、人間を、どうしても思い切れなかつたごたる。そうして自分は、この道化の一線ですずかに人間につながる事が出来たと思う。おもてでは、絶えず笑顔をつくりながらも、内心は必死の、それこそ千番に一番の兼ね合いとでもいうべき危機一髪の、油汗流してのサーヴィスじゃった。

自分は子供の頃から、自分の家族の者たちに対してさえ、彼等がどがん苦しく、またどがん事を考えて生きているのか、まるでちっとも見当んつかん、ただおそろしく、その気まずさに堪える事が出来んで、既に道化が上手になつた。つまり、自分は、いつのまにじゃい、一言も本当の事を言わん子になつた。

その頃の、家族たちと一緒にうつした写真などを見ると、他の者たちは皆まじめな顔をしているのに、自分ひとり、必ず奇妙に顔をゆがめて笑つとる。これもまた、自分の幼く悲しい道化の一種じゃった。

また自分は、肉親たちに何か言われて、<sup>くちごた</sup>口応えした事はいちどもなかつた。そのわずかなおごとは、自分には<sup>へきれき</sup>霹靂の如く強く感ぜられ、狂うごてなり、<sup>くちごた</sup>口応えどころか、そのおごとこそ、謂わば万世一系の人間の「真理」とかいうものに違いなか、自分にはその真理を行う力が無かとだけん、もはや人間と一緒に住めんとではななか、と思ひ込んでしまふのだ。だから自分には、言い争いも自己弁解も出来なかつた。人から悪く言われると、いかにも、もっとも、自分がひどい思い違いしとるごたる気がして来て、いつもその攻撃を黙して受け、内心、狂うほどの恐怖を感じた。

それは誰でも、人から非難されたり、怒られたりしていい気持がするものでは無かかも知れんが、自分は怒っている人間の顔に、<sup>しし</sup>獅子よりも<sup>わに</sup>鱈よりも竜よりも、もっとおそろしい動物の本性を見る。ふだんは、その本性をかくしとるごたるばって、何かの機会に、たとえば、牛が草原でおっとりした形で寝ていて、突如、<sup>しっぽ</sup>尻尾で<sup>あぶ</sup>腹の蛇を打ち殺すごて、不意に人間のおそろしい正体を、怒りに依って暴露する様子を見て、自分はいつも髪の逆立つほどの<sup>せんりつ</sup>戦慄を覚え、この本性もまた人間の生きて行く資格の一つなのかも知れんと思えば、ほとんど自分に絶望を感じた。

人間に対して、いつも恐怖に震いおののき、また、人間としての自分の言動に、みじん

も自信を持ってんで、そうして自分ひとりの懊惱<sup>おうのう</sup>は胸の中の小箱に秘め、その憂鬱、ナアヴァスネスを、ひたかくしに隠して、ひたすら無邪気の楽天性を装い、自分はお道化たお変人として、次第に完成されていった。

何ちゃよかせん、笑<sup>わ</sup>わせとけばよかと。そがんすれば、人間たちや、自分が彼等ノ

所謂<sup>いわゆる</sup>「生活」ン外にあったっちゃ、えったそりバ気にせんとじゃなかるかね。

ま、とにかく、彼等人間たちン目障りいなっちゃどいじゃもん。

自分な、無じゃもん。風じゃん、空じゃん、というような思いばかりが募り、自分はお道化に依って家族を笑わせ、また、家族よりも、もっと不可解でおそろしか下男や下女にまで、必死のお道化のサーヴィスをした。

自分は夏に、浴衣の下に赤い毛糸のセーターを着て廊下を歩き、家中の者を笑わせた。めったに笑わない長兄も、それを見て嘖き出し、

「それあ、葉ちゃん、似合わん」

と、可愛くてたまらんごたる口調で言うた。なに、自分だって、真夏に毛糸のセーターを着て歩くほど、いくら何でも、そがん、暑さ寒さを知らんお変人ではなか。姉の脚絆<sup>レギンス</sup>を両腕にはめて、浴衣の袖口から覗かせ、セーターを着ているように見せかけとった。

自分の父は、東京に用事の多いひとじゃったけん、上野の桜木町に別荘を持っていて、月の大半は東京のその別荘で暮しとった。そうして帰る時には家族の者たち、また親戚<sup>しんせき</sup>の者たちにまで、実におびたたくお土産を買って来るのが、まあ父の趣味みたいなものじゃった。

いつかの父の上京の前夜、父は子供たちを客間に集め、こんど帰る時には、どが<sup>てちよう</sup>んお土産がよかか、一人々に笑いながら尋ね、それに対する子供たちの答をいちいち手帖に書きとめた。父が、こが<sup>てちよう</sup>ん子供たちと親しくするのは、めずらしか事じゃった。

「葉蔵は？」と聞かれて、自分は、口ごもってしもた。

何が欲しいと聞かれると、とたんに、何も欲しくなごてなる。どうでもよか、どうせ自分を楽しくさせてくれるものなんか無かという思いが、ちらと動く。と、同時に、人から与えられるものを、どんなに自分の好みに合わなくても、それを拒む事も出来ん。イヤな事を、

イヤと言えず、また、好きな事も、おすおすと盗むように、極めてにが<sup>あじわ</sup>く味い、そうして言い知れん恐怖感にもだえた。つまり、自分には、二者選一の力さえ無かった。これが、後年に到り、いよいよ自分の所謂「恥の多い生涯」の、重大な原因ともなる性癖の一つだったごて思われる。

自分が黙って、もじもじしているの、父はちょっと不機嫌な顔になり、

「やはり、本か。浅草の仲店にお正月の獅子舞いのお獅子、子供がかぶって遊ぶのには手頃

な大さのが売ったばって、欲しゅうなかか」

欲しくなかか、と言われると、もうダメ。お道化た返事も何も出来ん。お道化役者は、完全に落第じゃった。「本が、よかるもん」 長兄は、まじめな顔をして言うた。「そうか」

父は、興覚め顔に手帖<sup>てちよう</sup>に書きとめもせず、パチと手帖<sup>てちよう</sup>を閉じた。

何という失敗、自分は父を怒らせた、父の復讐<sup>ふくしゅう</sup>は、きっと、おそるべきものに違いなか、いまのうちに何とかして取りかえしのつかんもんか、とその夜、蒲団の中でがたがた震えながら考え、そっと起きて客間に行き、父が先刻、手帖<sup>てちよう</sup>をしまい込んだ筈の机の引き出しをあけて、手帖<sup>てちよう</sup>を取り上げ、パラパラめくって、お土産の注文記入の個所を見つけ、手帖<sup>てちよう</sup>の鉛筆をなめて、シシマイ、と書いて寝た。自分はその獅子舞いのお獅子<sup>しし</sup>を、ちっとも欲しくは無かったばってかえって、本のほうがよかくらいじゃったばって、自分は、父がそのお獅子<sup>しし</sup>を自分に買って与えたかだという事に気がつき、父のその意向に迎合して、父の機嫌を直したいばかりに、深夜、客間に忍び込むという冒険を、敢えておかした。

そうして、この自分の非常の手段は、果して思いどおりの大成功を以て報いられた。やがて、父は東京から帰って来て、母に大声で言っているのを、自分は子供部屋で聞いていた。

「仲店のおもちゃ屋で、この手帖<sup>てちよう</sup>を開いてみたりゃ、これ、こけ、シシマイ、て書いてある。これは、私の字じゃか。はてな？ と首をかしげて、思い当った。これは、葉蔵のいたずらたい。あいつは、私が聞いた時にゃ、にやにやして黙ったが、あとで、どうしてもお獅子<sup>しし</sup>が欲しゅうしてたまらんごてなったつね。何せ、どうも、あれは、変った坊主だけん。知らん振りして、ちゃんと書いとる。そんなに欲しかとなろ、そがん言えばよかとに。私は、おもちゃ屋の店先で笑うたよ。葉蔵を早うこけ呼べ」

また一方、自分は、下男や下女たちを洋室に集めて、下男のひとりに滅茶苦茶<sup>めちやくちや</sup>にピアノのキイをたたかせ、(田舎だったばって、その家には、たいていのものが、そろうとった) 自分はその出鱈目<sup>でたらめ</sup>の曲に合わせて、インデヤンの踊りを踊って見せて、皆を大笑いさせた。次兄は、フラッシュを焚<sup>た</sup>いて、自分のインデヤン踊りを撮影して、その写真が出来たのを見ると、自分の腰布(それは更紗<sup>さらき</sup>の風呂敷)の合せ目から、小んかおチンチンが見えていたので、これがまた家中の大笑いじゃった。自分にとって、これまた意外の成功というべきものじゃったかも知れん。

自分は毎月、新刊の少年雑誌を十冊以上も、とっとる。またその他にも、さまざまの本を東京から取り寄せて黙って読んどったけん、メチャクチャ博士だの、また、ナンジャモンジャ博士などとは、たいへんな<sup>なじみ</sup>馴染で、また、怪談、講談、落語、江戸小咄<sup>こぼなし</sup>などの類にも、かなり通じとったけん、<sup>ひょうきん</sup>剽軽な事をまじめな顔をして言うて、家の者たちを笑わせるのには事を欠かんじゃった。

しかし、<sup>あ あ</sup>嗚呼、学校！

自分は、そこでは、尊敬されかけていた。尊敬されるという観念もまた、<sup>はなは</sup>甚だ自分を、おびえさせた。ほとんど完全に近く人をだまして、そうして、或るひとりの全知全能の者に見破られ、木っ葉みじんにやられて、死ぬる以上の赤恥をかかせられる、それが、「尊敬される」という状態の自分の定義でじゃった。人間をだまして、「尊敬され」ても、誰かひとりが知っている、そうして、人間たちも、やがて、そのひとりから教えられて、だまされた事に気づいた時、その時の人間たちの怒り、<sup>ふくしゅう</sup>復讐は、いったい、まあ、どがんじゃいろ。想像してさえ、身の毛のよだつ心地がする。

自分は、金持ちの家に生れたという事よりも、俗にいう「できる」事に依って、学校中の尊敬を得そうになった。自分は、子供の頃から病弱で、よく一月二月、また一学年ちかくも寝込んで学校を休んだ事さえあったばって、それでも、病み上りのからだで人力車に乗って学校へ行き、学年末の試験を受けてみたりゃ、クラスの誰よりも所謂「でき」よった。からだ具合のよか時でも、自分は、さっぱり勉強せず、学校へ行っても授業時間に漫画などを書き、休憩時間にはそれをクラスの者たちに説明して聞かせて、笑わせてやった。また、綴り方には、<sup>こっけいばなし</sup>滑稽噺ばかり書き、先生から注意されても、しかし、自分は、やめんじゃった。

先生は、実はこっそり自分のその<sup>こっけいばなし</sup>滑稽噺を楽しみにしている事を自分は、知っとった。或る日、自分は、例に依って、自分が母に連れられて上京の途中の汽車で、おしっこを客車の通路にある<sup>たんつぼ</sup>痰壺にしてしもた失敗談（しかし、その上京の時に、自分は痰壺と知らずにしたっじゃなかった。子供の無邪気ぶりを自慢げにわざと、そがんとしたと）を、ことさらに悲しかごたる筆致で書いて提出し、先生は、たぶん笑うどという自信があったけん、職員室に引き揚げて行く先生のあとばそっとつけて行たりゃ、先生は、教室を出るとすぐ、自分のその綴り方を、他のクラスの者たちの綴り方の中から選び出し、廊下を歩きながら読みはじめて、クスクス笑い、やがて職員室にはいって読み終えたのか、顔を真赤にして大声を挙げて笑い、他の先生に、さっそくそれを読ませているのを見とどけ、自分は、たいへん満足した。

お茶目。

自分は、所謂お茶目に見られる事に成功した。尊敬される事から、のがれる事に成功した。

通信簿は全学科とも十点じゃったばって、操行というものだけは、七点じゃったり、六点じゃったりして、それもまた家中の大笑いの種じゃった。

けれども自分の本性は、そんなお茶目さんなどとは、凡そ対蹠的なものじゃった。その頃、既に自分は、女中や下男から、<sup>かな</sup>哀しい事を教えられ、犯されていた。幼少の者に対して、そがん事を行うのは、人間の行い得る犯罪の中で最も醜悪で下等で、残酷な犯罪だと、自分はいまでは思うとる。ばって、自分は、忍んだ。これでまた一つ、人間の特質を見たごたる気持さえして、そうして、力無く笑うた。

もし自分に、本当の事を言う習慣がついとったなら、悪びれず、彼等の犯罪を父や母に訴える事が出来たのかも知れんが、ばって、自分は、その父や母をも全部は理解する事が出来んじゃった。

人間に訴える、自分は、その手段には少しも期待でけんじゃった。父に訴えても、母に訴えても、お巡りに訴えても、政府に訴えても、結局は世渡りに強い人の、世間に通りのいい言いぶん<sup>まわ</sup>に言いまくられるだけの事では無かるか。

必ず片手落があつとが、わかり切つとる、<sup>しよせん</sup>所詮、人間に訴えるのは無駄である、自分はやはり、本当の事は何も言わず、忍んで、そうしてお道化をつづけているより他、無い気持じゃった。

なんだ、人間への不信を言いよつとか？ へえ？ お前はいつクリスチャンになったとや、と嘲笑<sup>ちやうしやう</sup>する人も或いはあるかも知れんばって、しかし、人間への不信は、必ずしもすぐに宗教の道に通じとるとは限らんと、自分には思われるばって。

現にその嘲笑<sup>ちやうしやう</sup>する人をも含めて、人間は、お互いの不信の中で、エホバも何も念頭に置か<sup>ちやうしやう</sup>でにゃ平気で生きとるではなかるか。やはり、自分の幼少の頃の事じゃったばって、父の属していた或る政党の有名人が、この町に演説に来て、自分は下男たちに連れられて劇場に聞きに行た。

満員で、そうして、この町の特に父と親しくしている人たちの顔は皆、見えて、大いに拍手などしとった。演説がすんで、聴衆は雪の夜道を三々五々かたまって家路に就き、クソミソに今夜の演説会の悪口を言うとる。中には、父と特に親しか人の声もまじつとった。父の開会の辞も下手、例の有名人の演説も何が何じゃい、わけがわからん、とその所謂父の「同志たち」が怒声に似た口調で言いよる。そうしてそのひとたちは、自分の家に立ち寄って客間に上り込み、今夜の演説会は大成功じゃったと、しんから嬉しそうな顔をして父に言いよる。下男たちまで、今夜の演説会はどがんだつたと母に聞かれ、とても面白かつた、と<sup>ちやうしやう</sup>言うてけろつと<sup>ちやうしやう</sup>しとる。演説会ほど面白くなかもんななか、と帰る途々、下男たちが嘆き合<sup>みちみち</sup>うとつた。

ばって、こがんとは、ほんのささやかな一例に過ぎん。互いにあざむき合うて、しかもいずれも不思議に何の傷もつかでにゃ、あざむき合うとる事にさえ気がつかんごたる、実にあざやかな、それこそ清く明るくほがらかな不信の例が、人間の生活に充満しているごて思われる。ばって、自分には、あざむき合うとるという事には、さして特別の興味もなか。自分じゃったっちゃ、お道化に依って、朝から晩まで人間をあざむいとるもね。自分は、修身教科書的な正義とか何とかいう道德には、あまり関心を持てん。

自分には、あざむき合っているながら、清く明るく朗らかに生きとる、或いは生き得る自信を持っているごたる人間が難解である。人間は、ついに自分にその<sup>みょうてい</sup>妙諦を教えてはくれなかった。それさえわかれば、自分は、人間をこんなに恐怖し、また、必死のサーヴィスなんのせんですんだろで。人間の生活と対立してしもて、夜々の地獄のこれほどの苦しみを<sup>な</sup>嘗めんですんだろで。つまり、自分が下男下女たちの憎むべきあの犯罪じゃったっちゃ、誰にも訴えんじゃったとは、人間への不信からじゃなく、また<sup>もちろん</sup>勿論クリスト主義のためでもなく、人間が、葉蔵という自分に対して信用の殻を固く閉じとったけんだと思う。父母でさえ、自分にとって難解なものを、時折、見せる事があった。

そうして、その、誰にも訴えない、自分の孤独の匂いが、多くの女性に、本能に依って<sup>か</sup>嗅ぎ当てられ、後年さまざま、自分がつけ込まれる誘因の一つになったごたる気もする。

つまり、自分は、女性にとって、恋の秘密を守れる男であったというわけじゃった。